

# 私のカナダ研究

## カナダ文学

### 一老兵の述懐

平野 敬一



一九三〇年代前半にカナダのバンクーバーで小学校時代を送ったという環境の偶然から、私はカナダとカナダ文学に対する関心と愛着を早くから抱くようになった。インディアンを引く詩人ポリン・ジョンソンの詩編「わたしの權がうたう唄」などは教室で暗誦させられたせいもあり、今でもカナダの自然と文学に対する私のイメージの土台になっている。

当世風にいえば「帰国子女」の一人として日本へ帰った私は、その後順調(?)に日本で教育を受け、兵隊にもとられ、戦後は大学で英文学を専攻することになったが、少年時を過ごしたカナダに対する思いは断ち難かった。英文学を勉強しながらも、私は英米以外の国の文学をまったく視野に入れようとしないう偏狭な日本の「英文学研究」に当然不満があった。それで自分なりにカナダ文学の勉強に

志すようになったわけだが、その時期はカナダで「新カナダ文庫」(マクレランド&スチュワート社)の発刊をみたころ(一九五七年)とほぼ一致していたように覚えている。六〇年代に入って私にもカナダへ留学する機会が回り、漸く本腰を入れて勉強することができるようになった。当時は、カナダの大学においても、カナダ文学研究は黎明期。関係資料も、講座も、専門家も少なく、今からみるとウソのようなお粗末な研究環境だったが、関係者一人ひとりにパイオニア的な若々しい情熱があつて、私などは大いに得るところがあつた。

カナダ本国においてさえ黎明期だったカナダ文学研究が、日本でおいそれと育つはずはなく、日本の大学でカナダ文学研究を定着させることの難しさを、私はいやというほど思い知らされたものだった。しかし、これは一昔も二昔も前の話。現在では、日本でも、カナダ文学に関心を寄せる人びとの数は着実に増え、日本カナダ学会の一環として今までも時々研究報告がなされてきたが、ようやくささやかながら、カナダ文学会という形で発足できるところまで来た。去る二月に開かれたこの文学会の第一回例会で、ポリン・ジョンソンの詩についての研究発表(阪南大学・渡辺昇氏)がなされたの

は、私にとってはとりわけ感銘深いことだった。

とはいっても、英米文学研究に比べると、手軽に本や資料の入手ができないうし、学界や出版界の関心は低く、大学に専門のコースもほとんど開設されていないというふうには、カナダ文学を勉強する上での客観的条件の不利は依然として否めない。私などの古い世代は、こういう条件の不利を、いわば天与のこととして受入れてきたものだが、私より若いこれからの研究者は、そんな受動的対応には満足しないに違いない。(明治大学教授)

## 植生生態学

### 思い出深い各地での調査

小島 覚



植生生態学の研究を通じて、私とカナダとのつきあいは長い。一九六七年、ブリティッシュ・コロンビア大学大学院の学生として初めてバンクーバーの土を踏んで以来十六年、一貫してカナダは私にとって良い研究の場と興味ある素材を提供してくれた。

ブリティッシュ・コロンビア大学在学中は、植物学科のクラジナ教授のもとで、太平洋沿岸にあるバンクーバー島の西岸性針葉樹林の森林生態を研究した。アメリカツガ、ダグラススモミの巨木が優

先する、世界でもっとも生産性の高い森林のひとつである。ひと口に針葉樹林と言っても、決してそれは一樣なものではなく、その場その場の局地的環境の違いに対応して植生は複雑に変化し、またその下に発達する土壌も変化する。では、どのような森林植生がどのような環境のもとに発達しているのか、土壌の特性が植生の分化や森林の生産性にどんな影響を及ぼしているのか、その点を明らかにするのが、その時の研究の目的だった。

ブリティッシュ・コロンビア大学での課程を終わつた後、サイモン・フレージャー大学に移り、カナダ北部、ユーコン地方の植生を研究することになった。中部ユーコン地方は北米大陸における森林の北限にも近く、森林とツンドラが複雑に錯綜し、一種独特の景観が発達しているところである。おびただしい蚊の大群に悩まされつつ、一面のヤチ坊主が発達するツンドラの中を難渋しい歩いたのも今は懐かしい。

その後、エドモントンにある森林研究所でロッキー山脈の植生調査、アルバータ州の生態区分、森林立地分類等の研究に従事したが、その間アルバータ州南部の広漠たるプレーリー大平原、ロッキー山脈中腹部のうっ蒼たる山岳性針葉樹林、そして樹木限界上部に展開する高山帯、さらに州の北部に果てしなく広がる北方系針葉樹林等、さまざまな自然に接する機会に恵まれた。カナダは現在なお比較的よく自然が保存されている、世界でも数少ない国のひとつである。